

循環型の暮らし、故郷で

持続可能な暮らしの実現のために、暮らし方や働き方を再考する時が来る。新型コロナウイルス感染拡大を経て、国内の人の流れ、すなわち、暮らし方や働き方に変化の兆しがある。本稿では、未利用資源を活用してより充実した暮らし方や働き方を実現するため、地方から都市へ集中する人の流れを変化させながら、地方や日本全体を活性化させる方法について考えてみたい。

未利用資源を活用する 美食地政学

▷6

企業も新ビジネス探る



東京都市大学環境学部 環境経営システム学教授 古川 柳蔵

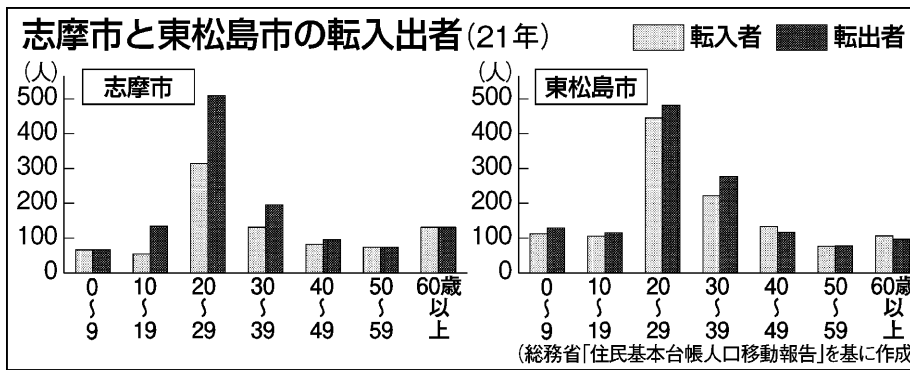
ふるかわ・りゆうそう 72年(昭和47)東京都生まれ。博士(学術)。東京都市大学環境学部環境経営システム学教授。専門は環境イノベーション。戦前の暮らし方、自然に学ぶものづくり、ライフスタイル変革の研究や地方・都市連携プロジェクトを行う。

少子高齢化の中で人の流れは2019年までは東京都に集中する傾向にあったが、20年以降、東京都は転入超過が緩和される方向に向かった。予想しなかった変化である。新型コロナウイルス感染拡大で在宅勤務が一気に普及し、新しい働き方へ移行したことも一つの要因だろう。

三重県では10年から転出超過が進みつつあったが、20年以降は緩和されている。宮城県ではそれほど変化が顕著ではない。これは新しいワークスタイルやライフスタイルへの転換の予兆なのだろうか。新型コロナウイルス感染拡大からの経済復興にあたり、環境に配慮した回復を目指すことは、世界的にグリーンリカバリーと呼ばれるが、都市から地方への人の流れが本格的に動き出し、自然共生社会や循環型社会に移行できれば、まさにグリーンリカバリーになる。

グリーンリカバリーの呼び水に

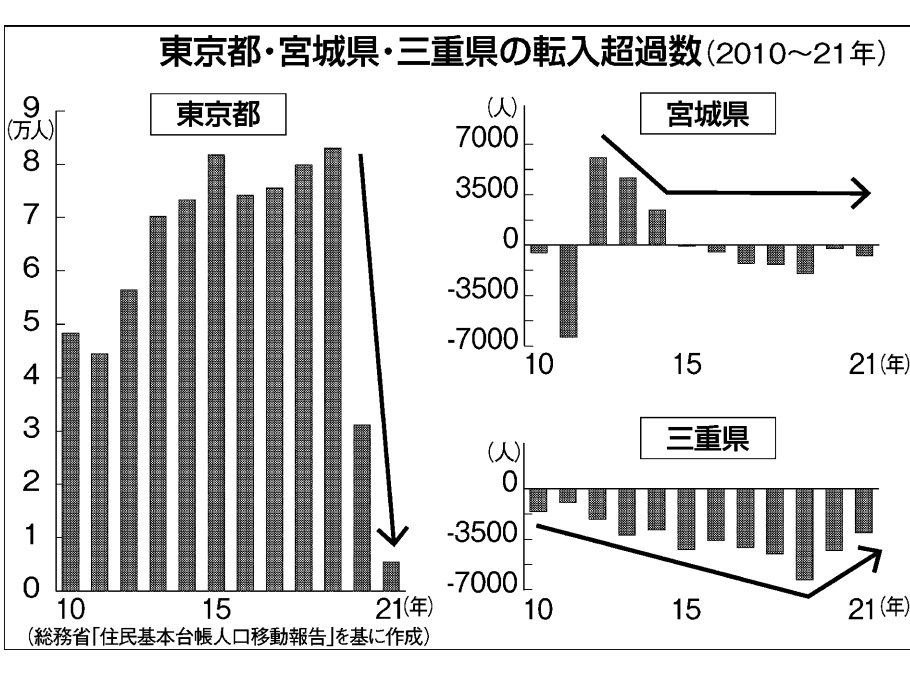
産したものに。自分がそこに存在することで循環システムが回るようにしたいというのである。地方へ移住する理由は多様である。それぞれ個人の人生に新しいレールを敷こうとしているからだ。知り合いの紹介で未利用資源を生かしているという人に会うために栃木県日光市を訪ねた。「日光茅葺の会」が人口減少地域に支援活動を行っている。同市土呂部に自生している未利用のカエデを用いて、地域住民と連携して「茅葺」を生産している。地域外の人の支援により地域住民と共に仕事を創出しているのが特徴である。未利用資源を生かして地域づくりを進める科学技術振興機構(JST)のプロジェクト「美食」も都市在住者とは限らない。地方の中での近隣の地



志摩市と東松島市の転入者(21年) 転入者 転出者 (総務省「住民基本台帳人口移動報告」を基に作成)

地方の人口は著しく減少している。地方で生まれた子どもは高校を卒業すると都市の大学へ進学するか、就職して定年退職後に地元に戻るケースが多い。地方都市から少し離れた場所にある三重県志摩市や宮城県東松島市の転入・転出者の状況を見てみたい。グラフに示すように20-30代までの転入・転出者は他の年齢層と比較して多く、60歳以上の転入者も多い。1950-60年の高度経済成長を背景に終身雇用制が普及し、一つの企業に勤め上げるという働き方が定着している。地方では都市より就職先が少ないため地域から転出せざるを得ない状況が続いている。

ワークスタイル転換



東京都・宮城県・三重県の転入超過数(2010~21年) (総務省「住民基本台帳人口移動報告」を基に作成)

域住民が支援活動を行いながら人材が流動している。企業も地方を支援しながら新ビジネスのチャンスがないかを探っている。同時に、持続可能な開発目標(SDGs)やカーボンニュートラル(温室効果ガス排出量実質ゼロ)な社会の実現に向けて、地方・都市間の関係人口を増やせないか検討している。



土呂部産「茅葺」の雪の華(日光茅葺の会提供)

プロ野球引退、帰郷し精肉販売

実家の家業を手伝うためにプロ野球チームの福岡ソフトバンクホークスを退団し、21年から地元の三重県伊勢市で豚肉の加工販売業に携わっている、まるとも荒木田商店精肉販売部キャプテンの江川智晃氏にセカンドキャリアについて話を伺った。なぜプロ野球を引退し、地元に戻って豚肉の加工販売をしているのですか。



まるとも荒木田商店 精肉販売部キャプテン 江川 智晃氏

自分がしかなできない仕事を。家族が事故でけがをしてしまったのですが、その頃、コロナ禍で家族と連絡を取る機会が増え、心配になり地元に戻ることを決めました。地元では皆の役に立てるようなことをしたいと思っていましたが、豚肉の加工業の仕事の話があり、一から勉強してみようと思うようになりました。世の中がこんなに暮らしやすくなっても、コロナ禍では皆がスーパーに買いに行く食材が一気に消えてしまうということが起こります。そのような大事な食材の生産にかかわることはすごく魅力的に映りました。一どのように地元で貢献したいと思っています。 「プロ野球でなかなか経験できないことをやってきましたので、これまでの経験や見てきた景色を子どもたちに伝えたいと思っています。三重県はそれほどプロ野球選手を輩出しているわけではありませんので、都会ではそのような機会が多いかもしれませんが、子どもたちと触れ合っていきたいと思っています。私は正解を持っているわけではありません」

「家族が事故でけがをしてしまったのですが、その頃、コロナ禍で家族と連絡を取る機会が増え、心配になり地元に戻ることを決めました。地元では皆の役に立てるようなことをしたいと思っていましたが、豚肉の加工業の仕事の話があり、一から勉強してみようと思うようになりました。世の中がこんなに暮らしやすくなっても、コロナ禍では皆がスーパーに買いに行く食材が一気に消えてしまうということが起こります。そのような大事な食材の生産にかかわることはすごく魅力的に映りました。一どのように地元で貢献したいと思っています。 「プロ野球でなかなか経験できないことをやってきましたので、これまでの経験や見てきた景色を子どもたちに伝えたいと思っています。三重県はそれほどプロ野球選手を輩出しているわけではありませんので、都会ではそのような機会が多いかもしれませんが、子どもたちと触れ合っていきたいと思っています。私は正解を持っているわけではありません」

(聞き手・古川教授)